
❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

蝙蝠僧と鳥鼠比丘とは何か？
——蝙蝠、仏教と東アジア宗教

2023 年 7 月 24 日(月)15:15～16:45
龍谷大学大宮学舎 西翼 2 階大会議室



入澤 氏（コメンテーター）、能仁 氏（司会）

❖ 概 要 ❖

2023 年 7 月 24 日（月）、龍谷大学世界仏教文化研究センター・龍谷大学仏教学会・龍谷学会主催、ハーバード大学の James Robson（ジェームズ・ロブソン）教授より「蝙蝠僧と鳥鼠比丘とは何か？——蝙蝠、仏教と東アジア宗教」と題した講演会が開催された。司会は、本学教授の能仁正顕氏が担当した。

以下ジェームズ・ロブソン先生の講演内容を要約する。

講 演 者：James Robson 氏（ハーバード大学教授・ハーバード大学アジアセンター所長）



James Robson 氏

講演は、ジェームズ・ロブソン氏がコロナ禍中、自宅の裏庭に飛び交う蝙蝠を目撃した経験譚から始められ、仏教と動物との関係を考える中で、仏教典籍における鳥鼠比丘のイメージに関心が湧いたと語られた。

中村元『広説仏教語大辞典』によると、鳥鼠はコウモリ（蝙蝠）の異名であり、鳥鼠比丘は破戒の比丘にたとえるという。なぜ蝙蝠と破戒比丘とが結び付けられたのかと、辞典の解釈に不審を覚えたジェームズ・ロブソン氏は、古今東西における蝙蝠のイメージを調査する

ことにした。

蝙蝠は、西洋文化、特に中世ヨーロッパの写本資料において、悪魔的な姿で描かれ、ネガティブなイメージが主であった。一方、中国の文化や民間伝承では、蝙蝠の「蝠」は幸福の「福」と発音が同じであることから、逆さまにぶら下がる蝙蝠の姿にかたどり、「倒蝠（逆さまのコウモリ）」→「到福（福がやって来る）」へと、幸運や長寿が連想される。他にも、刺繍や陶磁器などで五匹の蝙蝠をもって「五福」というめでたい言葉を表したり、仙人の鍾馗・李鉄拐の画像に蝙蝠がしばしばみられたりする。この積極的、ポジティブなイメージは韓国や日本にも伝わったと、ジェームズ・ロブソン氏が語った。

ところで、仏教典籍においては、玄奘『大唐西域記』卷二（大正五一・八八二上）には、洞窟に棲息する五百匹の蝙蝠が、旅人の誦する法音（阿毘達磨藏）を聴聞するために焼かれて死んで人間と生まれ変わり、修行して聖賢となった話が収めている。このように、蝙蝠はインドの仏道修行者にとってかなり身近の存在であったから、さまざまな仏教の譬喩に利用されたと、ジェームズ・ロブソン氏が指摘した。

鳩摩羅什訳『仏藏經』卷上（大正一五・七八八下）に「舍利弗、譬如蝙蝠欲捕鳥時則入穴為鼠、欲捕鼠時則飛空為鳥。而実無有大鳥之用、其身臭穢但樂闇冥。舍利弗、破戒比丘亦復如是」と、破戒比丘を蝙蝠に準える。ここを根拠として、「鳥鼠比丘」の喩えが広く知られるようになり、中国では道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』卷二、日本では無住『沙石集』（梵舜本）卷四第一話などに用例がみられ、イソップ寓話にも類話が確認できるという。